

## 経済財政政策部局の動き：経済の動き

# 経済財政白書は いかに作られたか

政策統括官(経済財政分析担当)付  
参事官(総括担当)付

室屋 孟門

### 伝統の経済財政白書

「日が昇らない日がないように、経済財政白書が発行されない年はない。」これは、経済財政白書(以下、白書)を作成している経済財政分析担当に代々受け継がれている言い伝えである。白書は1947年(昭和22年)に経済実相報告書として発行された後、名称を経済白書(正式名称は年次経済報告)、現在の経済財政白書(正式名称は年次経済財政報告)と変えながらも綿々と続いている我が国最古の白書である。前述の言い伝えは、白書公表後の打ち上げの際に、幹部挨拶にも引用されたが、それには続きがあった。「ただし、太陽は放っておいても自然と昇るが、白書は皆さんの血と汗と涙がなければ発行されない。」本稿では一人の係員という立場から、いかにして今年度白書が作られたかをご紹介します。

### 白書が生み出される環境

内閣府の経済財政分析担当の総括担当及び企画担当(以下、分析総括・企画)が白書を作成している。作成に携わるのは総勢約30名であり、政策統括官をトップに官房審議官、総括担当参事官(以下、参事官)、調査官、参事官補佐(以下、補佐)、担当者という布陣である。総括担当の担当者については、国際経済班、公共経済班、労働生活班、産業企業班、財政金融班、総括班に分かれて調査分析している。また、民間企業、他省庁等からの出向者が多く、様々なバックグラウンドを持つ人が集結しており、かつ、平均年齢30歳ほどの比較的若い組織である点が特徴である。

職場の雰囲気としては、各自でパソコンに向かってカタカタと分析業務に精を出し、水を打ったように静かな時間が流れることもあれば、各所で議論が巻き起こり、ワイワイガヤガヤ、ああでもないこうでもない

と活発に意見を交わすこともあり、時と場合によって様々な表情を見せる。特に白書作成期間は、通常業務(毎月の月例経済報告の作成、国会対応、人によってはマンスリートピックス等のペーパー執筆)に加えての作業となるため、部屋の明かりが消えるのが遅い日が多かったように思われる。

### 白書は鮮度が命

白書作成の最初に発生する作業がテーマ決めである。昨年末頃から、まずは課内でフリーディスカッションを行い、参事官を中心に補佐等が意見を出し合う。日頃の業務の中で関心が高まっているトピックや、これまでの各所からの要望等を念頭に置き、入念に案を練っていく。ここで白書の骨格が決定するわけであるが、今年度は少し事情が違っていた。昨年末の安倍内閣発足後から矢継ぎ早に政策等が打ち出されるとともに、それに伴って経済状況が大きく変化していったので、構成等を見直す必要が生じたのだ。特に影響を受けたのは第一章であり、景気持ち直し局面、金融政策のレジーム転換やデフレ状況の変化の分析を追加することとなった。2011年度白書においても東日本大震災が同年3月に起きたことにより、執筆途中でテーマの大きな変更が生じた。今年度はそこまでの変更ではなかったが、できるだけ最新の経済財政状況を踏まえた分析を行わなければ、白書そのものの価値が失われかねない。経済財政白書は「鮮度」を重要視し、読み手が今求めているものは何か常に意識している。

### 補佐等が原案を作成

テーマが決まればいざ分析ということになり、各章に割り当てられた担当補佐等を中心に執筆作業が開始される。役割分担としては、補佐等が実際の文章を執筆し、各担当者が補佐等の指示を受けながら図表を作成していく。つまり、どういった方法で、どのような結果を導き出し、いかなる文章にするかは、基本的に補佐等にかかっている。

第二章を例に挙げると、分析作業はもちろんのこと、その手前のヒアリング調査にも力を入れた点に特色があった。中小企業の実態や産業空洞化の影響を肌で感じたいとの思いから、実際に足を運んで地方の中小企業に訪問し、現場の意見を聞き取った。ヒアリングに当たっては、単に量をこなすのではなく、一つ一つの

<「全面削除せよ！」とのコメントに対して対策を検討する様子>



訪問先の周辺情報を事前に調べ、できるだけ有益な情報を引き出せるよう努めた。得られた情報は、直接に白書の文面で言及することはなかったが、様々な分析の素地としたり、アンケート調査の裏付けとして活用したりすることにより、内容に厚みが増したようだ。

また、補佐等の方針の下、担当者はいくつもの図表を作成することとなるが、図表は取捨選択され、お蔵入りすることもしばしばである。時には補佐等と担当者が衝突することもあったが、より良いものを作りたいという思いが強いゆえであろう。

### 作家と編集者

補佐等が書いた文章が固まってくると、取りまとめの参事官の手に渡り、修正が入る。参事官は分析の不十分な点を指摘するとともに、白書の最初の読み手として、一読して理解できるか、他の章との整合性は取れているか等、読み物としての質を高めていく。いわば補佐等が駆け出しの作家だとすると、参事官は経験豊かな編集者といった感じだ。普段は温厚な参事官も、時には厳しい指示も聞こえてきた（筆者は当時、参事官の目の前数十センチの席に座っており、ビクビクしたものだ）。参事官がチェックした後は、官房審議官、政策統括官と上がっていき、府内関係部局等との調整を終えると、内閣府としての原案が整うこととなる。

### 電話が鳴り響く日々

白書作成における最後の山場が各省協議である。白書は経済財政政策担当大臣の報告であるが、閣議で配布され、報道での注目度も高いため、関係省庁との協議を行わなければならない。あまり声を荒げることの少ない分析総括・企画のスタッフの面々も、手塩にか

けた白書のメッセージを守るため、受話器を片手に奮闘する。

各省等からは自らの推進する政策や主張等を踏まえて、多種多様なコメントが提出される。ごもっともな意見であればそのまま受け入れるべきであるし、こちらとしても譲れない内容であれば、突き返すこともある。時には「このグラフとそれに伴う文章は全て削除」等、見た瞬間に汗が止まらないコメントもある。まずは担当者が協議を行うことになり、恐る恐る電話をかけて協議スタートである。

ある担当者は、協議のために独自の資料を作り、あの手この手で説得を試みて、何とか納得できる形で落ち着いた。また、お互いのこだわりの点を明確に洗い出した上で、バーター取引で交渉を進めることもあった。特に民間企業からの出向者は、協議という存在自体に戸惑いを感じていたそうだが、連日連夜、遅くまで電話は鳴り続けていた。

### ついに完成

各省との調整も片がつくと、あとは公表を待つのみとなる。気がつけば、当初の予定を上回る約500頁の大作になっており、原稿は一番大きなダブルクリップでさえ収まり切らなくなっていた。印刷業者から製本版が納品されると、いよいよ閣議での配布となり、その日の夕刊等で紹介される。冒頭の言い伝えが身に染みるのはこの時である。

室屋 孟門（むろや たけと）